



michi

低気圧は人災なり

昔から台風や、暴風、洪水等はすべて天災といひ不可避の現象として諦めていたことは誰も知るところであるが、吾らからいへば実は天災ではなく人災である。それをこれから解説してみよう。今日これらの災害を少しでも軽減しようとして、科学は気象学の研究進歩に努力している。勿論日本においても年々多額の費用を投じ、できるだけだけの施設をしているが、果たして幾分の成果を挙げているか、なかなか所期の目的は達し得られないようである。視よ！ 年々右のために蒙る災害は実に巨額に上るのである。近い話が、今回のキティ台風にしては、数字に表れただけでも米の減収二百四十万石、家屋の倒壊流失四千二百二十九戸、死者行方不明を合わせて百四十四名に及び、負傷者の数は数方に達している。その他畑作の損害や道路護岸の荒廃、家屋や諸施設等の被害を総計すれば、当局の発表は八百七十億に上るとされており、いかに被害の甚大なるかが知らるるのである。しかも年に数回に亘る大小暴風の被害をも加えると、有形無形の損失は蓋し計上できないほどの巨額に上るのである。

とすれば、これらの災害を絶無にされないまでも、できうる限り被害を最少限に食い止むべく努力しなければならぬまい。勿論官民ともに能う限りの方法は講じているが、予算の不足等もあり予定の何分の一にも足りないほどの成果である以上、このままでは済まされないのである。とすれば、わずかに気象の研究だけを頼りにする現状としては、急の間に合うわけにはゆかない。まず百年河清を待つに等しいものであらう。ということは科学的研究は形而下的で、ちょうど物の表皮だけを窺てその内面を発見することができないからである。どうしてもその内面の奥にある根源をつかむよりほかに、絶対的方法はないのである。しかれば、そのような根本原因を知りうるにはいかにすればよいかで、吾らはいまそのことを告げたいのである。

そもそも、低気圧とはなにかというと、それは地上の空間すなわち吾らがいうところの霊界の清掃作用である。何となれば霊界といえども常に汚濁が堆積する。ちょうど物質的にいえば町や個人の家屋に塵埃が溜るようなものである。ただ霊界は眼に見えないため、汚濁の堆積が人間には判らないだけ

で、今日まで気がつきえなかったのである。勿論、現在までの学問が唯物物のみに偏し、唯心的研究を等閑視していた罪でもある。これが人類の最大欠陥であることは、吾らが常に唱えるところで、どうしても霊界の存在を認識し研究しなければ、低気圧の原理は容易に知りうるはずがない。

以上のごとき、否認の霊界の実在を認識せしむることこそ、宗教本来の使命であるのかかわらず、今日まで既成宗教においてはその点まことに微温的というよりも、無関心とさえ思われるほどであつて、不思議とさえ思えるのである。

余談はさておき前述のごとく、霊界に汚濁が堆積する以上、その清掃作用が自然に発生するのは当然である。すなわち風で吹き払い、水で洗うのでそれが低気圧である。まったく現実界の清掃作用と何ら異なるところはない。故にこの汚濁の根源を突き止めることこそ絶対解決の鍵である。しかれば一体汚濁とは何であるかというところ、それは人間の想念と言葉と行為によつて作られる曇りである。すなわち人間の悪の心、言、行が眼に見えない霊界に影響する。その結果、霊界に曇りが発生するのである。この理によつて今日大暴風が頻繁に襲来するということは、いかに人心が悪化し、悪言悪行為が多いかが判るのである。しかしながら右の曇りを消滅させる方法があるかというに、それは至極容易である。すなわち右の反対の方法をとればよいのである。いうまでもなく人心が善化し善の言行である。すなわち悪によつて曇らせられたる霊界を、善によつて晴らすのである。この場合善は光となつて曇りを解消する。例えばキリスト教においての讃美歌の合唱も、仏教における読経も、神道の祝詞もいずれも善言讃詞であるから、霊界清掃に幾分か役立つのである。故にもし右のごとき善言讃詞がないとしたら、いまよりも一層大きな低気圧が発生するわけである。

以上のごとくであるから、低気圧は人間が作つて人間が苦しむというのが真理で、自然は実によくできている。ちょうど人体に汚穢が溜れば、病氣という浄化作用が発生するのと同様である。

以上によつてみても、低気圧の防止手段としては右の原理を自覚し、悪を改め善を行えばいいので、それ以外根本的解決は絶対ないことを知るべきである。



重文 八字文殊菩薩及八大童子像
鎌倉時代（13世紀）
MOA美術館所蔵

この八字文殊は息災調伏を祈る本尊として八字文殊法の修法のために描かれたものです。文殊菩薩は通常頭髪を五髻(けい)に結っているのに対して、八字文殊は八髻に結い、真言も八字で表されることからこの名がつけられています。右手に智剣、左手に経巻を載せた蓮華を持つ。台座の両脇にはそれぞれ四人ずつ、眷属(けんぞく)である八大童子が描かれ、弓箭(きゅうせん)・三叉戟(さんさげき)・宝輪(ほうりん)・蓮華・孔雀の羽・三鈷杵(さんこしよ)・絹索(けんざく)・宝剣をとって文殊像を見上げるようにして侍しています。本図は、鎌倉時代の仏画特有の色調と動的なおもむきに富んだ力作です。

明主様は「日本画として驚くべき物は彼の仏画であろう」とおっしゃり、仏画を蒐集し美術館に展示されました。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
感謝奉告	10
お知らせ	11
ファミリー鍊成会特集	12
九月度ご面会(箱根)	16
世界平和祈願祭(熱海)	17
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて	18
シリーズ明主様(43)	21
「道」100号記念特集	24
聖地NOW	30
連載『神と繋がる明主様の食事観』(9)	33

表紙 99の表紙がつなぐ「道」

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが}

心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

九月中旬を迎えましたが、秋めくどころか、また暑さがぶり返してきているように思います。

いまだしも暑さのこれどその底に

秋のけはひのうすら流るる

(昭和8年8月21日 『山と水』より)

明主様は、歌集『山と水』のはしがきに

「私は最近、古い文庫の中から見つけ出した中に、昭和六年から十年にかけて、五年間に詠んだ千数百種の短歌が表われた。読んでみると、人の作品かと思わるる程に、忘れていた。読んでみると、人の作品かと思わるる程に、忘れていた。歌が大部分だ。然し、このまま葬るには惜しい気がする。という訳で、取捨選択すると共に、幾分の添削もし、歌集として今回出版することとなったのである。

私は、歌は本格的に習ったのではない。ただ好きなため、昔から今日までの本を多少読んだ位で、先ず素人歌人といってもいい。処が、万葉や古今調は、現代人には余りに難解であり、といって現代調は新傾向に捉われ過ぎ、写真に走り過ぎて品位に乏しい憾みがあると共に、言霊に於ても無関心なため、甚だ玲瓏味をかいている等々で、どうも得心が出来ない。というような次第で、私は、私としての個性を発揮したつもりであるから、可否は読者の批判に任せるのである。

昭和二十四年十月 熱海の寓居にて 明磨

と記されています。

昭和六年から一〇年といえば、『夜昼転換の啓示』から、『立教』までの神様の『経綸上大変重要な準備期間だったと拝察します。

また、歌集『山と水』については、「いつもいう通り、信仰の目的は魂を磨き、心を清めることであるが、その方法としては三つある。一は難行苦行や災害による苦しみと、二は善徳を積むことと、三は高い芸術によって魂を向上させることとである。以上のうち、最も簡単で、捷徑なのは、高い芸術による感化である。しかも楽しみながら、知らず識らず

に磨けるのだから、これほど結構なことはあるまい。

この意味において、『山と水』の和歌を暇あることによむことである。それによって不知不識魂は向上する。魂が向上すれば智慧証覚が磨かれるから頭脳が明晰となり、信仰も楽に徹底する。それというのも『山と水』の和歌ことごとくに真善美が盛り込まれているからである。

以上のごとく、私の目的は、言霊の力によっても信仰を進めんとするのである。」（「天国の礎」芸術193頁 昭和25年5月6日）

明主様のお言葉は単純明快ですね。これから歌集『山と水』の和歌に親しませていただきますしう。

九月一日、箱根神仙郷にて「ご面会」、熱海瑞雲郷にて「世界平和祈願祭」が厳かに斎行されました。前日の総合役員会に続き、私たち聖地直結の会執行部も信徒とともに救世会館にて参拝させていただきました。

八一年前の終戦に思いを馳せながら、今も世界各地で繰り広げられている紛争の終結と犠牲になられた方々のみ霊の安寧。また、八月二六日に発生したネパールでの大規模土石流、国内における直近の熊本地震はじめ、台風やゲリラ豪雨で犠牲になられた方々の救い、被災された方々の一日も早い復興をとともに衷心よりお祈りさせていただきました。

明主様は、『世界の大転換』（明日の医療 第三篇 昭和18年10月23日）のご論文の中で、

「抑々、此大宇宙を観る時、それは実に際涯なき天空の無限大より顕微鏡によっても視る事を得ない無限微に至るまで、

実に凡ゆる物質は大中小それぞれ相応の理によって生成を化育し、離合し、集散し、破壊し、建設しつつ、無窮の進展を遂げつつあるのである。そうしてすべてに陰陽ある如く一年にも寒暑の別あり、一日の中にも昼夜の別あり、十年にも昼夜の別あり、百年に千年に万年にもそれがあるのである。

以上の如き理によって、数千年か或は数万年目に当然来るべき夜と昼との転換期があり今やその時が来つつあるのであって、今日はその黎明期に相当するのである。」

とお説きになっておられます。

私たちが普段意識する時間の物差しは、人生百年時代を考えても、長くても百年単位だと思えます。災害が起こる度に「想定外」という言葉が使われるのも、現代の時間軸が限界を示していると思います。私たちの住む日本列島も、以前はユーラシア大陸の東縁部に位置していたこと、そこから分離し、現在の位置に落ち着いたのは約千五百万年前という点は、多くの研究者の意見が一致しているそうです。そうして三万八千年前に人類が日本列島に上陸し歴史を紡いできたのだそうです。

（中公新書 「日本列島はすごい」より）

私たちは本当に大変な時代の転換期に生かされているのですね。巻頭のみ教え『低気圧は人災なり』にあるように、時間空間を超えた人間の悪に属する心言行が霊界を曇らせ、災害の原因であるとの真理が世界の常識になる日も近いと思います。

人ごとと 思ひしこともいつしかに

わが身の上にもふりかかる世や

災害が遠い所で起こっているのではなく、すべて繋がっている出来事、ある意味、連帯責任との思いで祈り、寄り添い、ともに清まる努力をさせていただきましよう。

さて、当会発行の機関誌「道」が、この九月号でちょうど100号を迎えました。平成三〇年六月「聖地直結の会だより」第一号を発刊以来、八年間続けてこられたのは大神様、明主様のご守護のもと、全国の信徒から寄せられた「感謝奉告」の賜物です。

会員が全国に点在する当会の状況の中で、「道」が聖地と信徒をつなぐ重要な存在であり続けたことは間違いありません。今や当会の信徒だけでなく、たくさんの方ファンもできて到着を心待ちにしてくださっている方も多いと伺っています。これからも「明主様を見つめ真つ直ぐに歩む」信仰——浄まることで満足することなく、明主様のお役に立つ一人ひとりにならせていただけるよう、発行を継続してまいります。

それには信徒の皆さまの「信仰体験や感謝奉告」が欠かせません。鮮やかなご守護の奉告をはじめ、現在進行中の浄化の奉告、気付いたことや学んだことをありのままに奉告させていただくことが、全国の信徒の共感を生み、感謝の連鎖につながるものと信じます。現場でお世話に当たる資格者にも重ねてお願い申し上げます。

「道」七月号代表挨拶で述べたように、当会は宗教法人格取得を目指して大きく舵を切らせていただきました。以来、慎重に著実に準備を進めております。それはとりもなおさず、本来の私

たちの使命である「布教発展」に取り組んでいくということです。

最近の現場の報告を聞いていますと、今までの入信の在り方とは少し変わってきたところが表れているなど感じていきます。自分の今抱えている浄化を救われたい、問題を解決したいと門をたたき在り方はあるのですが、関わった信徒の人のために尽くす姿に感動、共鳴し、自分も是非「おひかり」を頂いて、お役に立ちたいと願う方々の報告が増えてまいりました。つまり、人生における生き甲斐、やりがいを求めている方が出てきているのです。『信仰は信用なり』のご論文に、「いかほど立派な信仰者のつもりで自分は思っているでも主観だけでは何らの意味もない。どうしても客観的にみてのそれではなくては本物ではないのである。そのような信仰者たるにはどうすればいいかということをもまず第一に知らねばならない、そうなるには理屈は簡単である。それは人から信用されることである。例えばあの人のいうことなら間違いない、あの人と交際をしていれば悪いことは決してない、あの人は立派な人である——というように信用されることである。

それでは右のような信用を受けるにはどうすればいいかというところもわけはない。なによりも嘘をいわないことと自分の利益を後にして人の利益を先にすることである。いわばあの人のお蔭で助かった、あの人につき合っていれば損はない、実に親切な人だ、あの人と遭うといつも気持ちがい——というようであれば、何人といえども愛好し尊敬することは請け合いです。」（「天国の礎 宗教下」163頁 昭和24年6月18日）まさにこのみ教えを彷彿とさせる事案です。一昔前に比べ

ると、何もかも便利になり、物が溢れ、豊かに思える現代社会ですが、自分は何のために生きているのか。肝心な人間の生き甲斐が失われているのかもしれない。

ここで少し私たち夫婦のささやかなお導きの体験に触れさせていただきます。私たちは長男秀基を二〇年前に失くしました。二四歳でした。「アルポート症候群」という腎機能が徐々に侵される先天性の疾患です。

私も妻も信仰熱心な親の許で過ごしてきました。特に私の母親は夫を病気で亡くし、明主様の薬毒論に始まる一連のみ教えに傾倒し、入信前の価値観から一八〇度変わったようです。小学校での予防注射接種も「アレルギーがあるから」という理由で、いつも教室に一人残り、何か寂しい思いをした記憶があります。お蔭で大きな病気をすることもなく専従を許され、結婚も許され、五人の子宝にも恵まれました。自分の経験からも子供たちにはできるだけ医者にかからず、異物を入れない育て方をしてきましたし、それが親としての誇りでもありました。

そんな中で、平成七年、長男の発病でした。まさに青天の霹靂であり、自分の中で何かが崩れ落ちるような感覚がありました。一二歳の息子が「お父さん、僕治るの」との問いかけに、笑顔で「絶対治るよ」と答えるのが精一杯でした。当時赴任していた松山布教所は大きな布教所で、専従者も一〇数名いました、本当に先生方や信者さん方にはお世話になりました。そんな中、地区本部主催の所長会があり、私は自分の置かれている状況を発表する機会があり、ありのまま報告しま

した、仲間からは「大変だね、頑張れよ」と励ましをいただきましたが、当時の地区本部長だった則武先生だけは違いました。後日面談をしていただきました。

「自分の置かれている大変さを思うより、子供の浄化は神様にお任せしてご利用なさい、誰よりも朝早く布教所に来て、誰よりも遅くまで頑張らなさい」と指導いただきました。金づちで殴られた感じでした。自分の心のどこかに、「自分は大変なんだ」と自分をかばうような、甘えた気持ちに気付きました。普段浄化している信者さんに言っていた言葉が自分の魂に響きました。

家内とも話し合い、信者の一員として、社会生活を送っているのも、信者さんに取り次ぐだけでなく、「自分たちもお導きが許されるよう取り組みよう」と、早速ご神前で祈りました。この頃には次男健人も同じ疾患があることが判明して、兄弟そろって入院を繰り返していました。家内も病院通いの日々でした。

神様は、早速答えを出してくださいました。ある日愛媛県立中央病院の玄関で、次男の同級生のお母さんにバツタリ出会ったのです。あらためて決心する前であつたら、単に挨拶や世間話で終わっていたと思います。家内は自然に自分が信仰していることをお伝えし、そして布教所へご案内することになりました。

先方には小さなお子さんが二人いました。布教所に着くと運よく則武先生にも会っていただくことができました。この方は、結果は残念ながら、自然と離れていきました。

しかし、数日後、私の担当している久万ブロックのある信者さんが、脳腫瘍で県立病院に入院されることになりました。妻も病院に通っていたので、その方に浄霊をお伝えしました。ある時浄霊をしていると、娘さん（未信者）が病室に入ってこられました。挨拶もそこそこに、娘さんは自分も懸命に手をかざされたのです。おそらく見ず知らずの他人が母親のために一生懸命になっている姿を見て「自分も」との気持ちに駆られての行動だったのではないかと思います。結果、この娘さんが入信されました。

私はこの経験を通して、まず自分がその気になること、「救いのご用にお使いいただきたい」と正直に神様に願うこと、自分の思いや都合にとらわれず、出会った人に誠をもつて尽くすこと、神様が順序よく、段取りをつけられることを学びました。

つづいて、『景仰』に学んでいきましょう。

神様がちゃんと段取りをつける

「ハワイ布教のため、渡航準備に何かと忙しいころ、私はちょうど激しい胃の浄化が続いておりましてので、霊的に浄めていただくことが何よりの準備と思い、ご多忙の明主様に、特別にお願い申し上げて、ご浄霊をいただいております。

そうした時のある日、私の心の中には、最悪の場合にも処する覚悟はできておりましたものの、使命のあまりにも重大なことを思い、果して私にできるかしらというような不安が、

ともすると脳裏に浮かんできてまいります。

私は何も申し上げなかったのですが、そうした私の心を存じであるかのように、明主様は、『神様の方ではね、あなたがアメリカへ行くように、ずっと昔から決まっていたのだよ。そのことが実現する時が来ただけのことだ』と申され、因縁の御用ということをはッキリとさとされて、覚悟も新たにさせていただくことができました。

また続いて、『神様がちゃんと段取りをつけられるよ。そこは人間が心配しないでも、実にありがたいものだよ』とも申されて、励まし力づけて下さったのです。

布教の方法など、どのようにさせていただいたらよいかと、いろいろ考えておりましたので、お伺い申しました時には、『それはね、あっちへ行けば、自然と神様があなたに思わして下さるんだから、思わせられたようにすればよい。わたしにも、いまはわからん』と申され、『神様があなたについておられるんだから、何も心配することはない』とお励まし下さり、最高の神を信じる者の幸福をつくづくと感じ、「われ、神とともにあり」の信念をいよいよ固めさせられたのであります。

（教会長）

（『景仰』539頁）

最後に「発展」に関する明主様のみ教えを学んで参りましょう。

発展の根本は大きくなろうという想念にある

「一番肝腎な事がたった一つあるんです。それはね、どうし

でも発展しよう大きくなろうって強く思う事ですね。それが根本です。俺は駄目だなんて思う事が一番悪い。俺も人間だ、人がやれるなら俺にだって出来るっていう気構えでね。失敗しても笑われても諦めないでどうしてもやり遂げるっていう、そういう人が発展しますね。私自身がそうなんです。それを、一度転んだらもうしようとしないうんじゃあ駄目です。「諦めが肝腎」と言いますがね。物によつてはそうですが、「諦めないが肝腎」ですよ。だから悪いことは「諦めが肝腎」いい事は「諦めないが肝腎」ですよ。」

(昭和24年3月)

人類を救うという熱意の強い人ほど発展する

「皆それぞれ持つてゐる心に原因がある。

治療時代に、私は治療士には治療屋と治療士とあって、治療をして安楽に食っていればいいというのは治療屋であり、大いに多くの人を助けなくてはならぬという愛の気持ちで従事するものを治療士といった。

世界人類を救わなくてはならぬという考えでやっている人は、その教導所はドンドン発展してゆくし、小成に安んずる人は、いい加減なところで発展が止まっている。要するに、世界人類を救うという気持ちの薄い人は発展が鈍い訳である。中にはそんなことは到底出来ないと思つてゐる人もある。然しこの教団は世界人類を救う力を持つてゐるのである。そしてみろくの世は作らねばならぬし、又造り得る時期になつてゐるし、私は、それを造るべき力を与えられている。だから決

して之を危ぶんだり、心配する必要はいらないのである。」

神様もその人の働きを重んぜられる

「信仰もそうですが、屁のような事で、大きな事を忘れてしまふのです。だから発展したいとすると、そういうことが必ずあります。私は今まで見てますが、小乗的の人は必ず発展しないのです。窮屈な感じがします。あなたはこういう事をしてはいけない。神様の思召しに適わない、というような事を言う窮屈になります。そうでなく、自由でゆつたりとした気持ちにならなければならないのです。又そうするのが、神様の思召しに適うのです。神様は小さな欠点はとらないのです。ただこの人間は一人でも多くの人を救うか、救わないかという手柄を主にするので。だから仮りにその人の欠点が三つあり、働きが七つあると、差引き四つはプラスになるから、そういう人は、神様の御守護が強いのです。それで一つの欠点とすると、六つのプラスになるから非常に御神徳がある事になります。」

(昭和28年4月25日)

季節の変わり目には体調を崩しやすいものです。夏の疲れも出る頃でもあります。どうかくれぐれもご自愛くださいますように。ありがとうございました。

感謝奉告

新たな歩みにいただいた喜び

土佐みろく教会 信徒一同



土佐みろく教会信徒一同

明主様からお導きいただき、私たち土佐みろく教会は、昨年、長い間お世話くださった先生方の退職に伴い、本部の先生方、他県から定期的に出向くださる先生のサポートを得ながら、基本的には信徒代表、地域長、事務担当、そして、信者さんお一人お一人と協力しながら、日々のご用ご奉仕を務めさせていただくこととなり、昨年末からスタートいたしました。それまでには、前代表が何度かお越しくださり、私たちの声に耳を傾けてくださいました。そして、会としての願い、

代表ご自身の想いも話してくださいました。

不安や問題点もあるように思いましたが、当会にいただいた「明主様と聖地に直結する」という名のごとく、
「今まさに一人ひとりが倣わせていただくチャンス、時期を迎えている」ということを感じさせていただきながらのスタートとなりました。

した。

信徒代表、地域長、事務担当を軸に、男子信徒の協力、また所属する信者さん方の理解や協力を得ながら、祭典、行事などを遂行させていただく中で、退職された先生と取り組ませていただいていた勉強会も、「継続か、終了か」と話し合う中で、改めて継続させていただくこととなりました。そして、新たな発見や学び、気付き、そして、思いもしない証を見せられ感じさせていただく機会も賜りました。

そんな日々にお伝えさせていただき、地上天国祭も近づいてきた時、主に未信者さんをお世話してくださっている信者さんから、入信を希望されている未信者さんのご奉告が教会に入りました。ちょうど地上天国祭が執り行われ、その月末に定期出向される先生の予定もありましたので、その日に合わせてお世話の信者さんと未信者さん、信徒代表や地域長、事務担当も参列して、入信教修と入信式をさせていただきました。

朝拝後、しばらく先生とお世話の信者さん、案内された方に入信教修を取り次ぎ、その後入信式を無事執り行わせていただくこととなりました。この未信者さんは、知り合いからこの信者さんのことを聞き、ご自宅を訪ねられたようです。足が少し不自由なこの未信者さんに、お世話の信者さんはそつと横から手を翳し、ご浄霊を取り次いだようです。足が楽になり身体も温かくなっていることを感じられ、訪ね続けるうちに、「最高の神様に出会えた」と思われたようです。そして、「早く「おひかり」をいただいて、誰かのためにお役に立たせていただきたい、喜んでいただけるような活動をして

いきたい”という気持ちへと導かれ、土佐みろく教会に来られる度にそのことを私たちに話してくださっていました。

驚いたのは、この方のお顔が、入信式前とその後ではまるで違っていたことです。満面の笑みがこぼれ、これから「おひかり」を胸に、「二人でも多くの方の幸せに役立ちたい」と入信前に言っていたその気持ちが溢れ出ているような姿でした。

そして、入信式の後、早速その日の朝のお話をしてくださいました。普段、家の中を歩く時も杖を必要としていたのに、入信式の日には杖のことも忘れて、家の中を歩いている自分に気付き驚かれたとのことです。一時的なことではありますが、不思議な体験をされたこと、早速、ご神前にて感謝奉告をしてくださいました。

「入信されたご本人もさることながら、参列を許された私たちも、入信式の後、晴れやかに、そして、輝いた顔をしていました。そして、ご神前がいつも以上に明るく眩しく感じました。そして、何よりも一番、このことを明主様がお喜びくださったているのだ、と感じさせていただきました」と出向された先生も話してくださっていました。

地上天国祭の節目のみ祭りを経て、御生誕祭に向けて、明主様と聖地に直結する会の一員である、土佐みろく教会信徒一同、一人ひとりが、「明主様と聖地に直結する信仰」を培う道を、変わることなく歩み続けさせていたのだきたいと願っています。

ありがとうございます。

み教え「世界救世教とは——明主様の『世界観』『人間観』に学ぶ」発刊

包括法人・世界救世教では、2018年に「世界救世教とは——明主様の御教えに求めて」、2023年に「世界救世教とは——明主様に倣いて」を発刊し、この度、第3弾となるみ教え「世界救世教とは——明主様の『世界観』『人間観』に学ぶ」が発刊され、全信徒宅に届けられました。

本冊子では、私たちが生きるこの世界に目に見えない霊界が存在すること、人間は神の律法の中で生かされていること、人間を取り巻く宇宙観・世界観を紐解いています。

これまでの2冊と併せて本書を拝読し、明主様のみ心を求め、実践を重ねることで、ご神意を覚り、安心立命の境地を許され、地上天国建設のご用にお仕えする人として歩ませていただきたいと願います。

明主様と聖地に直結する会

対話型研修で学び合う

——「いのち」を見つめると「魂」が語りはじめる

■一昨年、昨年の鍊成会を振り返って

一昨年の鍊成会では、「みんなの主張」と題し、年代や職業の異なる5人の方々が、それぞれの立場から日々の信仰実践や明主様のみ教えを交えて主張を述べられました。主張者と聴き手の双方にとって、深い学び合いの場となりました。

昨年は、4人の専従者が「聖地」「浄霊」「自然農法」「芸術」について、世界救世教の最新の様子を交えてお話ししました。最新の歩みこそが、明主様のみ心の最新の現われであると考えたからです。

その中で、特に印象的だったのは、参加した20歳の女性未信徒の反応でした。友人の母親が某宗教団体にのめり込み、友人も巻き込まれ大変な思いをした姿を見た経験から宗教への不信感を抱いていた女性が、鍊成会を通して世界救世教の社会性や行政機関からの信頼、世界的な広がりや正しく理解し、「明主様のみ教えは今も生きている」と感じられたことでした。これは、まさに明主様からのメッセージの一つではないかと受けとめました。

■ワークショップという「型」へ

一昨年・昨年の鍊成会の経験から、鍊成会を一つの「型」として捉え、そこから広がる「フィールド」として、一般社会でも広く取り入れられている手法「ワークショップ」ならば活かせるのではないかと考えました。

※ワークショップについては後の段でご説明します。

ワークショップの目的は「明主様を知っていただく」「明主様のみ

心やお考えに賛同する人を増やす」ことにあります。受け身の学びでは「理解したつもり」になりやすいですが、ワークショップは体験を通じて感じ、考えを深めるため、理解に実感がともないます。「知識として知る」だけでなく、「体験して腑に落ちる」という感覚を得られるのがワークショップの醍醐味です。

昨年の鍊成会終了後から、どのようなワークショップであれば、「明主様を知っていただく」「明主様のみ心やお考えに賛同する人を増やす」という目的を果たせるかを思案し、何度もミーティングを重ね、ついに形となり、今年の鍊成会でのお披露目となりました。

■ワークショップとは

ワークショップとは、参加した一人ひとりが自分で考え、周りの人と協力しながら、ひとつのテーマを深めていく「体験型の学びの場」です。学校のオリエンテーションや地域の集まり、企業の研修などでも広く使われていて、ただ話を聞くだけではなく、「自分で感じる」「自分で気付く」「みんなでつくる」というプロセスが大切にされています。進行役には「ファシリテーター」と呼ばれる人が立ち、参加者が安心して発言できるよう場を整えます。ワークショップには、いくつかの大切な約束があります。

- ・ 誰の意見も否定しない
- ・ 自由な発想を大切にする
- ・ これまでの考え方に捉われない
- ・ 互いの気付きを尊重する

こうした約束を最初に共有することで、年齢や立場が違っても、みんなが安心して話し合える「あたたかい場」が生まれます。ワークショップは、最終的に参加者全員で気付きを共有することで、学びが深まり、心に残る体験となります。

■今年のテーマ「いのち」

「いのち」とは何でしょうか。簡単に言えば「生きていること」「人生そのもの」です。しかし、信仰者として「いのち」を考える時、私たちは日々「正しく生きたい」「誠実でありたい」「明主様のみに心をお応えしたい」と願いながら生活していることを、まず確認したいと思います。

■「誠」とは何か

「誠」とは信仰から生まれるものであり、「魂」の曇りをなくすこと、「魂」の光が心の隅々まで届く努力をすることが「誠」です。

明主様は、「魂」は神様の分霊であり光そのものであると教えてくださいました。つまり「魂」は私たちの中心、「いのちの中心」なのです。しかし現実には、怒り・哀しみ・恐れ・欲・見栄・我・執着などの感情が心に雲をかけ、魂の光を遮ってしまうことが多いのではないのでしょうか。

■「魂」にどうすれば触れられるのか

今年の錬成会では、「いのち」とは何か「魂」とは何か「いのちの中心」にある「魂」にどうすれば触れられるのか、これらに迫りたいと考えました。自分の考え・感情・価値観を一度そつと手放し、ワークショップに臨むことで、

◎私は本当はどう生きたいのか

◎私は何を大切にしたいのか

◎私はどんな人でありたいのか

その答えが静かに浮かび上がってくる、すなわち「魂」の声に触れられるのです。

■ワークショップ「魂を大切にする歩み」

今年の錬成会の参加者からワークショップにチャレンジしたことで「自分を見つめることができた」「自分の心の癖を知ることが

できた」「どうすれば魂に触れることができるのかを学べた」などの感想があり、ご好評いただきました。

そこで、読者の皆さまにもワークショップで使用したワークシートをご覧いただくことで、ワークショップを知っていただけると考え掲載します。

併せて、ワークシートの回答例(次頁)を掲載しますので、ぜひチャレンジしてみてください。

■最後に

今回のワークを通して、あなたの「魂」はどのように感じられたでしょうか。温かい光として感じた方もいれば、静かな泉のよう感じた方もいるでしょう。驚くことに「魂」が語りはじめた方もいるのではないのでしょうか。

その気付きが日常の中で静かに広がり、「魂」の光がさらに輝いていきますようにお祈りしています。

私たちは、本気で「地上天国建設」を果たせると信じています。

私たちは、本気で「神性人間」に成れると信じています。

そのためにも、人生という「いのち」の旅において最も重要な、自分の本質である「魂」を深く知り、家族や未信徒を「神性人間」へと導き、お世話することが大切だと考えます。

一年に一度の錬成会、三回の積み重ねによって明主様はご導きくださいました。

実は、一昨年、昨年の錬成会も、今年の錬成会に繋がっていて、私たちの「いのち」の毎日を彩っているのですね。

そして今年、明主様は、「いのち」とは何か、「魂」とは何か、そして、「いのちの中心」に存在する「魂」に、どうすれば触れることができるのか、迫ることをお許しくださいました。

明主様のお導きの中で、これからともに歩ませていただきます。しよう。

(文責・和田 博)

ワークショップ「魂を大切にする歩み」のワークシート

《回答例》

1. 今日のテーマ

『魂磨き 心清めて世を救ふ、尊き神業(みわざ)に励(いそ)しめよ皆(みな)』

このお歌のご神意を、日常の体験と照らしながら深めていきましょう。

2. 導入ワーク



Q1. あなたにとって“魂”とはどんな存在ですか？

自由に言葉を書いてみてください。(例: 光、中心、静けさ、神様とのつながり など)

- ・自分の中にある本質的なものかな
- ・神様の分霊(わけみたま)であり、光そのものだと思う。

3. 心と魂の関係を見つめましょう



Q2. 最近、あなたの心に“雲”がかかった出来事がありましたか？

(例: 悲しかったこと、腹が立ったこと、許せなかったこと、不安になったこと など)

- ・神様の事をとても熱心に学んでいる方が、理不尽な振る舞いをされた事に対して、「そんな事をするなんてありえない」と心の中で批判し、怒りを友達に言ってしまった事かな。



Q3. その出来事を、“魂の視点”で見ると、どんな意味があると思いますか？

(例: 魂が何を教えてくれているのか、心のどの部分が浄化されようとしているのか など)

- ・心を主体とした考えで、人を裁いてしまっている。
- ・相手の不完全さを見せられる事によって、自分自身の不完全さを認識させられた。

4. 提案:「温かな想念」を育ててみませんか

- ・「すべての人が明主様とともにある」と思ってみませんか
- ・「すべての人が明主様のお役に立っている」と思ってみませんか
- ・「すべては明主様のみ心の現れである」と思ってみませんか

 Q4. あなたが最近、誰かに対して抱いた“温かくない想念”は何でしたか？
(例:批判、嫉妬、怒り、見下し、無関心 など)

・Q2 で答えましたが、「怒り」「批判」、友達も巻き込む「裁き」の想念は、
温かくありませんでした。

 Q5. その想念を“温かな想念”に変えたとしたら、どんな言葉になりますか？
(例:あの人も明主様のみ心の中にある、あの出来事にも明主様のお考えがある など)

・理不尽な事をされた方も、何かで心に余裕がなかったのかな。自分だけが明主様の
お役に立っているのではなくて、あの方も明主様のお役に立っているんですね。

5. 魂の学びを日常に活かしてみませんか

 Q6. 今日からできる“魂を磨く小さな実践”を 1 つ書いてください。
(例:否定的な思いが出たら明主様を思い浮かべる、感謝を書く、誰かの幸せを祈る など)

・夜、布団に入った時、今日も色々あったけれど、それらを「正しい」「間違っている」
「良い」「悪い」、そういった自分の物差しをベッドの横に置いて、そのすべてが
「明主様のみ心の現われだったのですね」と定め、全部◎と思って寝てみます。

6. 共有タイム

- ・気づいたことを発表してください
- ・明主様を感じた瞬間があれば発表してください

7. 最後に

 Q7. 今日のワークを通して、あなたの“魂”はどんなふうに感じられましたか？
自由に表現してください。(言葉、イラスト、詩、俳句、短歌、川柳など何でも OK)

・まぶしい光輝く魂から、温かなほっこりした魂の光を感じました。

・イラスト

・俳句「わけみたま 目覚めの時ぞ 夏ヒカリ」





ご神業の推進を誓い、被災地の復旧・復興を祈った



外観がほぼ出来上がり、館内の施工が進む光明会館



箱根美術館の改修工事も着々と進む

明主様の人間観に生きる

(箱根) 9 月度ご面会

9月1日、光明神殿にて「ご面会」が執り行われた。災害の被災地の復旧・復興と人々の安寧を祈念した。中島MOA理事長は、光明会館や箱根美術館の建設が進む中、「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」の実践として、東京都町田市での事例を紹介。明主様の人間観に立ち、一人ひとりの尊さを見つめ、同じ願いをもつ人々と協働する大切さを強調した。さらに「生きてる宗教」のみ教えに触れ、人をケアする生き方とMOA資格者の使命を示した。来年の地上天国祭には光明会館で初めてのご面会が許されることを報告し、総仕上げへの決意を述べた。



世界の平和と全人類の幸福を願い、祈りを捧げた



教祖記念室にて明主様の御書を拝観する拝観者



水晶殿の絶景を楽しむ拝観者

(熱海)世界平和祈願祭

大乘の心を世界へ

9月1日、救世会館にて世界平和祈願祭を斎行。各地の災害で犠牲となられた方々に哀悼の意を表し、被災地の復旧・復興と世界の平和、人々の安寧を祈念した。杉原いづのめ教団理事長は、「大乘たれ」のみ教えに基づき、み心に沿って全人類の幸福を願うことの大切さを強調。さらに、スリランカの青年大会と祖霊大祭について報告し、浄霊やみ教えを通して人生が変わり、信仰の喜びを人々に伝える現地信徒の姿を紹介。世界へのみ教えの広がりに触れ、明主様のみ心に倣い、世界平和と地上天国建設にお仕えしていくことを呼びかけた。

東山荘

昭和一九年八月、明主様は静岡県熱海市東山にあった別荘を購入され、地名にちなみ「東山荘」と名付けられました。同年一〇月から昭和二十三年一〇月までの四年間、熱海でのご神業の礎となる最初の拠点となり、本館は生活の場、別館は全国から訪れる信徒とのご面会や、光明の間での「おひかり」「ご神体」のご揮毫、み教えの執筆などに用いられました。

戦後、交通事情の厳しい中にも全国から信徒が集い、ここを舞台に本教の発展の基礎が築かれていきました。また、明主様は東山荘から望む山々を指し、「今に、この向こうの山に、何千人も収容できる建物を造る」と将来の構想を語られました。現在、その山には瑞雲郷が広がっています。

東山荘は今日、教祖記念館として保存・管理され、平成二八年には本館や別館など七つの建造物が国の登録有形文化財に指定されました。



別館・ご面会所にて開かれた会食会(昭和20年12月23日)



別館全景



別館・ご面会所



入手当時の瑞雲郷



本館・2階から瑞雲郷を望む



離れ・応接室。宗教活動が禁止された当時、明主様は会食会の形で指導された



明主様のご家族の団らんの場とされた本館・1階居間



本館・2階明主様ご寝室



本館全景



離れ全景



東山荘から初島を望む



明主様が右のお歌を詠まれたとされる本館・風呂場

草創期の先達

立教以前から教祖の側近として活躍した人に、また、岡庭真次郎（明治二六年・一八九三年生）、通明（本名遼平）

（明治三八年・一九〇五年生）の兄弟がある。岡庭家は長野県飯田いいたの旧家で、父は村長を勤めていたが、脳血管の病気で倒れてから家族の間に大病が続き、一〇年間に葬式が八つ、家の全焼が二度という災厄に見舞われた。麴町の竹村良三が、娘の養子をこの岡庭家から迎えたことから、両家に姻戚関係ができた。その後、竹村が教祖に、岡庭家の災厄を話したところ、教祖は名前がいけないといって、遼平という名を改め、通明と付けたのである。

その後、通明は肋膜ろくまくをわずらうこと三年、ついに医師から見放されてしまった。そして、やっとの思いで上京すると、竹村の家で初めて教祖の浄霊を受けた。

その時教祖は、

「三回ぐらいで治る。」

と大変簡単に言ったという。二度目の浄霊は二日後に、兄・真次郎が付き添い、大森の松風荘へ行つて受けた。

教祖は、真次郎に向かって、

「岡庭さん、あなたが、今にここ（大森のこと）をやるようになるんですよ。」

と言ったが、まだ何もわからない真次郎は、

「ああそうですか。」

と生返事なまをするだけであつた。

通明に対する浄霊を終えると、教祖は、

「どうです。」

と聞いた。通明が、

「せいせいしました。」

と答えると、教祖はいとも簡単に、

「もう治りましたよ。」

と言った。真次郎はあまりのことにただ驚くばかりであつた。

しかし通明自身は、

「もうなんともない、有難いからお礼に掃除当番に置いていただきたい。」

と頼んだという。

数日後、通明はその言葉通り大森へ来て奉仕を始めた。その翌月、教祖は富士登山をしたが、通明もこれに参加し、回復後間もない身体ではあつたが、無事に行を共にできた。富士登山の翌日、教祖は通明に、観音像と御手代みてしろとおひねりを与え、

「信州へ帰って支部を作り、人を救うように。」

と命じた。その御手代は、一本の扇で、扇面に、

「万霊を浄めて救ふ此扇」

と記されていた。

通明は信州へ帰り、布教を始めたが、その年の一二月ふたび大森へ帰り奉仕生活にはいったのである。一方、兄の真次郎は弟が救われて以来毎日のように大森に通い、教祖の話聞くうちに、しだいに決心が固まって、昭和七年（一九三二年）一月から、大森で奉仕生活を始めた。そして昭和八年（一九三三年）には教祖の言葉通り大森の支部長に任命されている。ここにも、教祖の言霊の力と、それに呼応するように、すべてをなげうって教祖の言葉に従った先達の尊い姿を見ることができるのである。

岡庭兄弟は共に几帳面な性格であつたから、どんな些細なこともゆるがせにしない教祖の手足となつて、側近の奉仕に務めた。真次郎は昭和二年（一九五四年）六月一日、享年六二歳で、通明は昭和四五年（一九七〇年）二月二三日、享年六四歳で帰幽したのである。

昭和六年（一九三一年）の暮れのことであつた。東京の亀戸で鉄工所を経営する荒屋乙松（明治三二年・一八九八年生）

という大本の信者が教祖のもとを訪れた。弟の和作（明治三四年・一九〇一年生）の妻が病気で、教祖の浄霊を受けていた。乙松は、弟から教祖のことを聞き、和作と一緒に大森へ出かけて浄霊を受けると、重かつた頭が軽くなり、元気がわいてきた。乙松は教祖に挨拶して帰る時に、

「こういう強い力をいただくには、何十年かかりましたか。」と尋ねた。すると教祖は、

「なあに、これは素直にやれば、誰にでもできるんです。

あなたにだってできるんですよ。」

とこともなげに言い、さらに言葉を継いで、

「あなた、やる気がありますか、すこし修行すればできます——。」

と言つた。しかし、とても自分にできるとは思われず、突然のことに、困惑して何も言えずにいた。すると教祖はじつと見据えるようにして、

「あなたはこういうことをしなければならぬ人に生まれてきているんです。」

と言つた。このことがあつてから、乙松はしばしば大森へ行くようになった。行かずにはおれない、何か強く引かれるものがあつた。それは、いやおうなく引きつけられる不思議な力とでもいうべきものであつた。そして行くと病気が次々と癒されていく奇蹟を目のあたりにし、ただ驚くばかりで、教祖に対する尊崇はいよいよ深まつた。

乙松はその後、教祖揮毫の観音像を祀り、月次祭には教祖

に来てもらおうようになった。来訪を請うと、

「ああ行きますよ。」

と気軽に言って、いつも来てくれたのである。当時はまだまだ信者の少ないころのことで、教祖はあちこちへ気軽に向いたのである。乙松の家に来て食事をする事があったが、教祖は何を出してもおいしそうに食べ、愉快に話をしたという。荒屋乙松はその後間もなく、鉄工場をやめて神業の道にはいった。

「君は江東支部をやりなさい。」

と言われしばらく下町方面を布教した。そしてある程度の信者ができたころ、今度は、

「世田谷へ行きなさい。」

と言われ、昭和九年（一九三四年）一〇月二六日、渋谷にほど近い、世田谷区三宿町五四へ移って布教を続けた。まだ浄霊を許されていなかったもので、布教の手段は新聞配布だけであった。乙松は妻・秀子と二人で配布に取り組み、一部二銭の新聞の売り上げの一部で暮すという毎日であった。神業に参加できる喜びは何ものにも代え難いものであったが、昭和九年（一九三四年）の暮れには貯金も使い果たし、正月を超すのがやっとという厳しい生活であった。

昭和九年（一九三四年）十二月二六日、「大日本観音会」

世田谷支部として正式に発足すると、兄・乙松が支部長に就任し、弟・和作が次長に任命された。その三日後の二九日のこと、教祖からすぐ来るようにという呼び出しがあった。年

の瀬を迎えて、乙松にはあいにく電車賃の持ち合わせがなく、三宿町からそのころ教祖の住まいであった麴町区平河町の応神堂まで十数キロの道のりを歩いて行つた。すると教祖は、

「あんたはこの三年間よくやった。今日までの修行で神業の大略はわかっただろう。今日から施術（浄霊）を許すから大いに人を救うことに励むように。」

と言つて御手代を与えたのである。尊い力を許された喜びを、苦楽を共にしてきた妻に伝えたい一心で、来た道を一散に走るようにして帰り、共に喜び合つたという。

乙松は後に、岩手県一関市を中心として布教に専念し、「進々教会」（後に「神進教会」と改称）を設立したが、昭和四二年（一九六七年）八月七日、七〇歳でこの世を去つた。一方、弟の和作は郷里の石川県能登の中島町に帰り布教し、「生和教会」を設立した後、昭和三九年（一九六四年）七月三〇日、享年六四歳で帰幽したのである。

次号に続く『東方之光』（上巻）より

——この一冊から始まった当会の歩み



2018年6月創刊号

二〇一八年六月、「聖地直結の会だより」第一号が発行されました。以来、第一号から第十九号までは「聖地直結の会だより」として、第二〇号からは「道」として、一冊一冊、歩みを記録してきました。そして今号で、一〇〇号という節目を迎えました。

各誌面には、その時々のお出来事だけではなく、明主様を仰ぎ求め、聖地に直結して歩もうとする信徒の思いと実践が刻まれています。一〇〇号を迎えた今、あらためて最初の一步に立ち返り、創刊当時どのような思いでこの会がはじまり、

どのような信仰姿勢を大切にしようとしてきたのか振り返りたいと思います。

創刊号に寄せた

則武克明初代代表の挨拶



会員の皆さまには、厳しい教団情勢の中で「明主様とともに生きる」ことを決意され、当会にご参加くださいましたこと、誠に嬉しく、また、ありがたく思わせていただいております。明主様から許された尊いご縁の出会いとして、心より感謝を申し上げます。(中略)

『聖地直結の会』を四月一日に立ち上げて早くも二ヶ月が経過いたしました。全くのゼロからのスタートでしたが、皆さまの誠溢れる信仰実践のお蔭で、今や北は北海道から南は鹿児島まで全国ほぼ均等に信徒の皆さまが、明主様を見つめて真つすぐ歩む“信仰を掲げられ、当会の目的と活動を支持し、参加されるようになりました。日々会員の申込みの報告が全国から届けられております。現役の職員も四名を抱えるまでになり、組織として自立運営できる一歩手前まできています。

しかし、まだまだ緒に就いたばかりで信徒の存在も点在という状況ではありますが、今後も皆さまの誠の結集をさらにお許しいただき、(中略)点から線へ、線から面へと明主様信仰の輪を拡大させていただきたいと明主様にお誓いさせていただきます。

ります。今後とも皆さまのご協力をお願い申し上げます。(中略)

〔明主様はいつもお傍に〕 当会の信仰イメージ

『聖地直結の会』では「明主様とともに生きる」ことを目指しています。

今日まで私たちの信仰は、明主様と自分の間に「布教所や所長」「仲間や家族」が居てくださり、陰に陽に信仰を支えてくださいました。たいへんありがたいことでしたが、この度はそのような他者に頼る信仰から一歩成長した自律信仰を求められているように感じます。

この度の教団混乱の中で明主様から発せられてくる「お声」

「私を信じ切ることができますか？」

「何があっても脇目も振らず、私について来れますか？」

「何があっても私の傍にいつも居なさい！」

「あなたの信仰の姿を私に見せなさい！」

「私があなたを必要としているのだ！」

と聞こえてくるように思えます。

何者かに依存する信仰から、日々明主様のお姿を思い浮かべ、直接心を通わせ、明主様に祈り「明主様」と言葉に出して感謝申し上げる。

そのことを繰り返す。想像するだけでも心に安らぎをいただけます。

そして、「明主様」にお喜びいただくために、周囲を明るくし、周囲に安らぎを与え、周囲を天国的にするために汗をかく。

明主様も笑顔で寄り添ってくださる。そのような人こそ明主様に愛されるでしょう。そのような私たちになりたいものです。

日常の信仰生活では

『聖地直結の会』では、全国に会員が点在されています。従いましてその信仰環境はさまざまです。布教施設が身近に有る方。信徒仲間が身近に居られる方。ほとんど孤立状態の方。しかし、私たちの信仰環境・境遇はどんなに違ってても、目指す信仰は、只一点「明主様とともに生きる」であります。

境・境遇とは、人の都合の問題であり、明主様はすべてご存じの上で公平平等であると信じます。明主様との距離は自分次第であり、結果の差異はそこから生じてくるものと思います。

まずは、基本を改めて大切にし、スタートをいたしましょう。

〔明主様との交流〕

日々家庭のご神前でご参拝させていただきましょう。

〔明主様と一体に〕

家族で日々、ご浄霊の交換をいたしましょう。

〔明主様からお力を〕

毎日、自分で定めた時間、み教えを拝読させていただきましょう。

〔明主様の代理人として〕

家族や友人知人との挨拶や感謝の言葉を大切にしましょう。

〔明主様への誠のお捧げ〕

絶えず良いことをしようと心がけましょう。

2018年

歩みの第一歩——聖地に集い、み教えを学ぶ



箱根祖霊舎(紫微宮)における祖霊合祀祭



北海道の信徒と祈りを捧げる



箱根聖地参拝、ご奉仕に励む会員



主な歩み

- ・4月 聖地直結の会発足
世界救世教と協定書を締結
- ・6月 「聖地直結の会だより」創刊
- ・7月 聖地・祖霊舎へ祖霊合祀が完了

信徒の信仰活動

- ・聖地参拝だけでなく、地域で仲間と集い、み教えを学び、浄霊を取り次ぎ、日々のご守護を感謝奉告する
- ・創刊当初から、一人ひとりの実践が数多く紹介される
- ・聖地奉仕や自然農法・自然食など、み教えを生活の中で実践する姿が広がる

2019年

信仰実践を深め、歩みを広げる



執務棟にて行われた資格検定研修会



田川布教所にて開催された九州信徒大会



神仙郷にて行われた第1回聖地奉仕修養会



鋸山・天啓聖蹟に集う徳島集会所の信徒

主な歩み

- ・4月 土佐みろく教会発会
(高知県土佐市を拠点に、活動開始)

信徒の信仰活動

- ・「報恩感謝で、まず浄霊実践、一人が一人を」をスローガンに、「一つ心のチーム」づくりを目指す
- ・信徒同士が話し合い、支え合いながら信仰を深める
- ・聖地参拝や奉仕活動を中心とした信仰活動が継続される

2020年

困難の中でも信仰を深め歩む



感染症対策を行い参拝する田川布教所信徒

東方之光施設で行われた関西信徒集会



インターネット中継で参拝する徳島の信徒

則武代表と土佐みろく教会信徒

主な歩み

- ・2月 新型コロナウイルスの感染拡大
- ・7月 土佐みろく教会、新館へ移転
- ・10月 感染症対策のため入場数が制限された中、聖地参拝が再開

信徒の信仰活動

- ・参拝や集会が制限される中でも、家庭でのみ教え拝読、浄霊、祈りなど、それぞれできる信仰実践に取り組む
- ・インターネット中継による新たな参拝の形が始まる
- ・コロナ禍でも信徒同士のつながりを保ち、各地で信仰活動や拠点づくりを進める

2021年

立教の原点に立ち返り、実践を深める



鋸山・天啓聖蹟にて清掃奉仕とご参拝

いづのめ教団施設で交流を深める藤枝信徒

主な歩み

- ・明主様が鋸山で天啓を受けられてから90年の節目を迎え、「立教の原点」に立ち返る一年として取り組む
- ・神仙郷の山月庵・日光殿の修復が進む中、聖地を後世に継承するため、東方之光・いづのめ教団と歩調を合わせて聖地建設に参画する方向が示される

信徒の信仰活動

- ・「一日二人の浄霊」を目標に、家族に浄霊、遠隔浄霊などの取り組み
- ・家庭での祈り、み教えの実践
- ・各家庭でのリモート参拝などを通して聖地とのつながりを保つ



御生誕祭に合わせ、2年ぶりの全体会合

熊本集会所に集う信徒

2022年

西村代表を迎え、新たなスタート



主な歩み

- ・明主様御生誕140年。「明主様が示された『道』を求め、まっすぐ歩む—祈り・実践・感謝—」を年間の課題として掲げる
- ・1月 西村正資新代表が就任
- ・10月 神戸須磨集会所開所

信徒の信仰活動

- ・各地で家庭集会、浄霊会、祈願参拝、み教え拝読会など、信徒が主体となった活動が徐々に再開。信仰の輪を広げる

花による天国化を実践する土佐みろく教会信徒

全国信徒集会にて挨拶に臨む西村新代表



平安郷一泊奉仕研修を実施

神戸須磨集会所に集う関西信徒

2023年

再び聖地に集い、活動の輪を広げる



主な歩み

- ・神仙郷完成70周年。聖地への理解を深め、その継承を願う歩みを進める
- ・新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、聖地参拝や信徒同士の集まり、奉仕活動などが従来に近い形で再開される

信徒の信仰活動

- ・聖地参拝や信徒同士の交流が、コロナ禍以前に近い形で行われるようになる
- ・各地で信徒集会や浄霊会が再開し、直接顔を合わせて信仰を語り合う機会が増える
- ・聖地での清掃奉仕や奉仕研修など、実際に足を運んで活動する姿が広がる

第3回宿泊奉仕研修会を実施。東山荘を拝観

いづのめ教団施設で鹿児島信徒集会を開催



初となる徳島信徒集会を開催

一堂に会した四国資格者

2024年

聖地に集い、新たな歩みへ



2024年から全国信徒集会とファミリー錬成会が平安郷で毎年開催となる



主な歩み

- ・ 5月 平安郷にて全国信徒集会開催
- ・ 8月 ファミリー錬成会初開催
- ・ 9月 神仙郷宿泊奉仕研修会実施
- ・ 「令和の平安郷建設」連載

信徒の信仰活動

- ・ 聖地参拝者が増え、交流が広がる
- ・ 行事や地域集会に多くの会員が参加
- ・ 聖地・施設で奉仕活動が本格的に再開

2025年

信仰を生活に生かし、地域へ広げる



関西地域でみそづくり&食育セミナー開催



平安郷にて開催された全国信徒集会

主な歩み

- ・ 立教90周年
- ・ 全国信徒集会に包括役員をお迎えする

信徒の信仰活動

- ・ 地域での集い、学びの機会が増加
- ・ 11月 いつものめ教団施設に東方之光職員をお迎えして「みそづくり&食育セミナー」を開催

2026年

明主様と聖地を見つめ直し、次の一歩へ



全国信徒集会にて挨拶に臨む立石新代表



田川布教所にて九州合同月次祭を斎行

主な歩み

- ・ 3月 立石博新代表が就任
- ・ 7月 宗教法人設立準備委員会の設置
- ・ 「聖地・聖蹟シリーズ」連載
- ・ 「神と繋がる明主様の食事観」連載

信徒の信仰活動

- ・ 次の時代に向けた歩みをともに考える

「道」100号を迎えて

創刊から各号に記されてきた歩み。明主様を仰ぎ、聖地に心を寄せ、それぞれの場所で信仰を实践する姿が積み重ねられてきました。明主様のみ心を求め実践する歩みは、これからもそれぞれの場所で続いていきます。

NOW



光明会館の上空に現れたハロ(日暈)
ひがさ

神仙郷



明星ヶ岳(大文字)を望む



紫微宮から神山荘を望む



景観台から熱海の市街を望む



瑞雲郷を彩る白とピンクのシモツケ



大輪の花を咲かせるヤマユリ

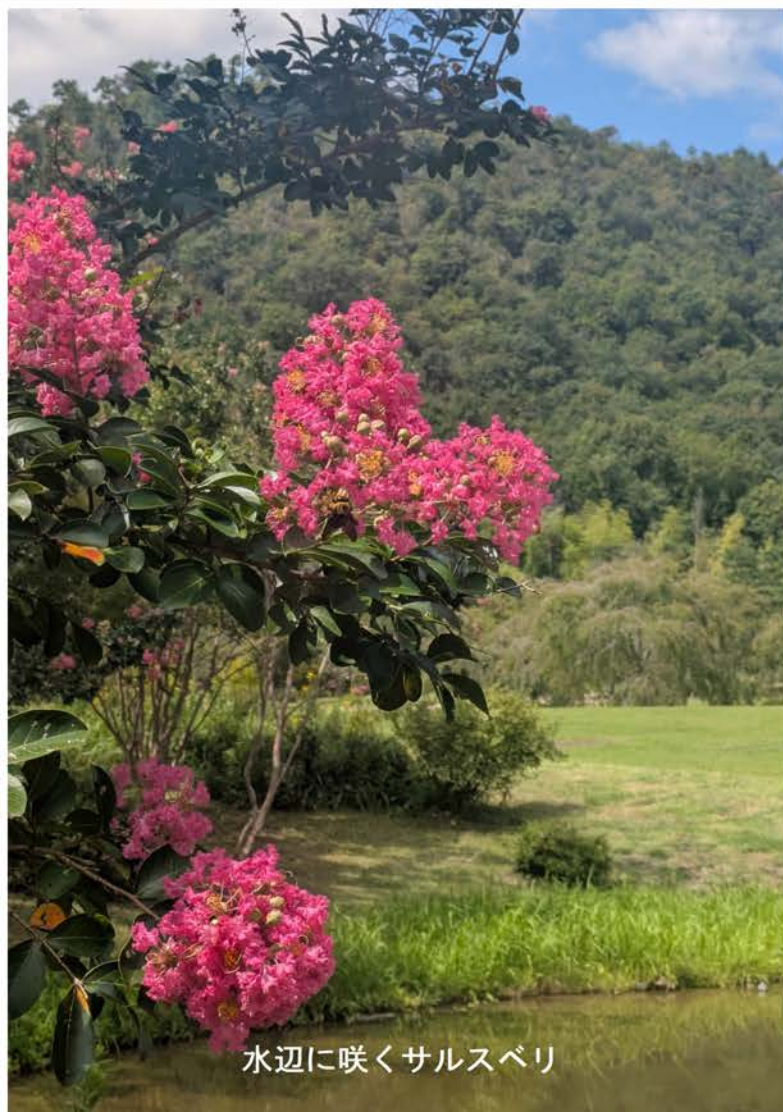


竹柵に止まるオオシオカラトンボ

平安郷



池越しに望む春秋庵



水辺に咲くサルスベリ



庭を彩るナツズイセン

靈氣について（II）

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

「靈氣^{れいき}」は明主様の食事観において象徴的な概念です。

数年前、靈氣の概念を太陽のエネルギーに例えて教えてくれた先輩がいました。

その内容は、「太陽の光を直接受けて育つ植物は、靈氣が多量に含まれる。動物は、植物を食べて育つため二次的であり、太陽エネルギー直接の植物に比べ、希薄になっている」という説明でした。とてもシンプルで解りやすい靈氣の受けとめ方でとてもうれしく感じました。

これを見教えに照らし合わせてみましょう。

「（前略）」というのは地球の構成元素である。それは曩^{さき}に説いた如く三段階になっている。即ち一、靈界 二、空氣界 三、現象界であって、之を一言にして言えば、一は火素が本質であり、二は水素が本質であり、三は土素が本質である。勿論一は日の精、二は月の精、三は土の精であって、此三原素の力によって、一切は生成化育されている以上、人間と雖も其三元素の力によって、生命

を保持されているのは勿論である。（後略）」

（文明の創造 科学篇「心臓」昭和27年）

「（前略）」そうして本来、物質の元素は土であり、凡ゆる物質は、土から生じ土に還元する事は、何人もよく知る所である。次に、半物質である水の元素は、月球から放散されて、空氣に充滿している。然るに靈氣とは、太陽から放射される物質でもなく、半物質でもない処の非物質であるから、今日迄未発見であつたのである。故に、最も判り易くいえば、土が物質、水は半物質、火は非物質と言えるのである。

右の如く、物質の原素が土で、空氣の元素が水で、靈氣の元素が火であって、此三原素がいずれも密合して、そこに力の発生があるのである。これを科学的にいうならば、三原素なるものが、ほとんど想像も付かない程の微粒原子として、融合活動しているのが、宇宙の実体である。（後略）」

（明日の医術 第二篇「発熱」昭和18年10月5日）

明主様は、この宇宙すべては、靈界と現界で成り立ち、そのためのエネルギーは太陽、月、地球から放たれる「火素」、「水素」、「土素」の三つの元素である。この三つの元素の体は、「光と熱」、「水」、「窒素」であり靈は未発見であると。そして三元素が融合して生まれるものがXでありそれを自然力という。この自然力Xが万物すべて

の生命力の根源であると説かれています。

野菜や穀物といった植物は、「光と熱」、「水」、「窒素」という三元素のエネルギーが融合し三位一体となり自然力Xが生まれ、その力により育ちます。光合成という不思議な作用もこの自然力Xによって生まれると考えられるのではないのでしょうか。光合成は副産物として、二酸化炭素から酸素を生成します。私たち人間が地球上で生きていられるのは、約三〇億年前から現在までの間、たくさん植物や光合成微生物が酸素を作り出しているからなのです。この宇宙の構成原理である「火素」、「水素」、「土素」の霊は未発見と書かれています。この三位一体が生んだ自然力Xによって育った野菜には霊気が多量に含まれているということ。これを照らし合わせると、成長中の植物の中で行われている何かしらの元素転換されたもの、もしくはその時の副産物が、霊気となり私たちの身体の本体である霊の栄養となるのだと捉えられます。光合成微生物の一種である光合成細菌は自然農法栽培で収量を増やすなどということも分かっています。

鶏や動物はと言いますと、植物を食べて育ちます。その段階で霊気は薄くなってゆくのだと考えられます。

正直言いますと、霊気概念、また火素、水素、土素や宇宙の構成原理等々、私たちが学校で習った科学とは異なるので、み教えを読んでいても避けて通る内容でし

た。しかし、「岡田茂吉の食事観」や私たちの健康のこと、そして自然農法について表現する時には避けて通れない内容です。私が先輩からこの霊気の説明を聞いて喜んだ理由は、「おひさまの光をたくさん浴びた野菜を食べると元気になるよ」と、一言で伝えられると思えたからです。少し難解なみ教えを、子供からお年寄りまで多くの方々が理解していただけたらと思います。食事を通して神様を感じ、神様と人間との関係を学び、多くの方々へ伝えて行くことが私たち信徒の役割なのだと思います。



瑞雲郷のザクロ



十五夜のお月様

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1 階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 100 2026年9月15日発行

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

